

平成26年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	四日市市立西陵中学校	氏名	天野 勝
-----	------------	----	------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

日本と地理的にも文化的にもつながりからも遠い国。そういう国に出かける時はわくわくする。それは、これまで知らなかったことに出会える喜びであり、またそれを知ったことにより自分を振り返ることができる楽しみである。そして自分だけでとどめておくだけではあまりにも物足りず、自分自身がこの目で見、体感したことを伝えることで、一人でも多くの人に世界や日本・自分自身の生活を見つめ直す機会を提供することができる。

「伝えるべき体感したこととは何か？」小規模農家による農業生産や現地で働く日本人の活躍、感染症の恐怖とその対策、ガーナ人の生活や学校での子どもたちの様子など、伝えるべき事柄は数多い。これらを授業実践に生かすために、どのように教材化し、どのように深めていくかが後半戦の焦点になる。達成度はその時に量られることになるが、宝の持ち腐れにならないよう、貴重な機会に得たものを整理し、有意義に活用していきたい。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

『伝統を重んじるガーナ』と『新しいもの好きの日本』。一つの対比が生まれた。『ものづくり大国』日本と言われるように、日本人の技術力や正確さ、新しいものを生み出す応用力は世界の中でも特筆されている。

一方ガーナでは、「言ったことがなかなか伝わらない」「時間を守らない」「よくさぼる」「製品のできより収入を優先する」などと現地スタッフが労働者について批判を述べることもあったが、私は少しちがった印象を持った。

まずは食事。ヤムイモ、キャッサバ、プランテン、米、メイズ(コーン)、パーム油、ヤシの実ジュースなどを材料に、フーフー・バンクー・オムツオ・アペラシなどをいつも食べる。ガーナ人は、スープにいろいろなものを入れるガーナ食をすばらしい文化だと思っている。

そして農業。小さなコミュニティごとに和気あいあいと作業に従事し、年長者をたたえ、子どももその手伝いをする。じゃんけんをせずとも、物事が解決できるような親密な人間関係。効率や丁寧さという意味では、日本人には耐えられないような点もあるが、ギスギスした人間関係や競争・分刻みのスケジュールで多くのストレスをかかえる日本人からすれば、忘れ物を見つけたような感覚にとられることがある。また次から次へと新製品を生み出し、そのたびに新しいラベルに取り換えたり、まだ食べられる食品を大量に捨てたりしている点は、日本としても見直すべきではないか。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

ガーナ滞在中、最大の出来事と言えば、蚊に刺された衝撃であったが、そこから日本とガーナのつながりについて考えた。

感染症の研究に生涯を捧げ、黄熱病ワクチン発明の研究のさなか、実証実験中のガーナの地で自ら命を落とした野口英世の功績を受けて、日本の政府開発援助（ODA）による野口記念医学研究所が設置された。現在はそこで「ガーナ由来薬用生物による感染症研究」プロジェクトが5年計画で実施中であり、その様子を見学させてもらった。多くの日本人医療関係者がそこで働き、感染症の多いガーナの医療に貢献している様子や、プロジェクトのリーダーをしているガーナの方が偉ぶらない社交的な態度で、私たちに自分の学生時代や今の職に就いたわけを話す様子を見るにつけ、野口英世を通した2国間の絆を感じた。定期的にガーナ人医師が日本に来て研修をしているという話も聞き、ガーナからアフリカ全体に医療の進歩が広がるのではないかとという予感がした。滞在中、エボラ出血熱の話題が持ち上がり、そのことでJICAの関係者が忙しく走り回っていたのも印象的だった。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

私自身は人生の目標として『まあ、いい人生だった。』と思えて死ねたらいいな。』といつも考えながら生活しているが、人類共通の課題として『幸せ』が一つのキーワードになるのではないかと思う。

ガーナ滞在中、一番こころが安らいだのはガーナ人のだれもが笑顔で手を振ってくれることだった。日本なら子どもでさえ、相手を卑下したりからかったり無視したりする場面に事欠かないが、ガーナでは、他人でもこちらから手を振れば、素直にそれを喜び、振り返してくれる。間違いなく日本人が忘れた精神の一つである。社会が複雑化すれば、ひずみが出てくるのは当然で、今更、後戻りするのはむずかしいところもあるが、「何が大切なのか？」という基本に立ち返らせてくれた。

産業の発展、医療の充実、生活水準の高度化など、世界の先端を行く所も多く、他の国に見習ってほしいことは数知れないが、日本人の一人として、謙虚さを持ち、自立的援助と共に、相手国から学ぶ姿勢を失わないようにしたい。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

今回の研修では、ガーナで働く多くの日本人に接することができた。それぞれの方が魅力的で、現地に溶け込み、堂々と活動している姿が印象的だった。

出会った青年海外協力隊3人衆は、小柄できゃしゃで、大柄なガーナ人の中では一際目立ったが、現地の人たちに慕われ信頼されながら、快活に動き回る様子は、生き生きと輝いていた。学校、農家、教育委員会とそれぞれ活動の場はちがうが、周りの人たちに笑顔で接したり、堂々とものを言ったりする姿は、隊員として選ばれる前も含め、多くの経験の中で培われてきた結果なのだろうと思った。シニアボランティアの方には一人しか会わなかったが、ユーモアを交え、教材や仕事の様子を楽しそうに話してもらった。

専門家にも何人か出会った。稲作や医療協力、太陽光パネル、それぞれのプロジェクトに参加している専門家たちは、専門知識を生かし、プロとしてガーナ支援の中心的存在として活躍されていることが分かった。

JICA職員や専門家の多くが青年海外協力隊出身であったり、ガーナに来る前もアフリカの他国で活動さ

れていたりしていた、というのも印象深かった。気候や健康、国民性や生活習慣など、誰でも対応できる仕事ではないと感じた。このような方のおかげで日本の印象がよくなっていることも想像するが、それもまた大きな国際貢献なのだと思う。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

① JICAガーナ事務所（概要説明、安全・健康対策、ガーナの教育）

ガーナ到着後、すぐにJICAガーナ事務所へ。田中次長はじめ4人の方に、ガーナの現状や生活の工夫についての説明をもらった。

ガーナは治安がよく、政治が安定している。英語が公用語でもあり、「西アフリカのエントリーポイント」「西アフリカ民主主義のリーダー役」などと言われる。2010年には石油商業生産も始まり、2011年にはアフリカ最大の経済成長率14.4%を記録した。しかし、燃料代が高騰し、物価高が激しくここ1～2か月だけでも20%上昇した。南北格差が激しいし、インフラ・公共サービスも不十分である。ガーナにはまだまだ課題が多い。

安全・健康対策については、「火の通ったものを食べる」「水はボトルウォーター」「辛いものに気をつける」「熱帯性マラリアは怖い。治療が遅れると死ぬ。」「夜は出歩かない」「車優先社会である」などを教えてもらったが、実際はその通りには生活できなかった。

教育については、「男女格差がある」「理数調査で42か国中最低点」「教師の質が問題」「教材の未整備」「もともと読み書きの習慣がない」「計算を教えるのが主」などの話があった。この時はよく分からなかったが、研修をしているうちに、その意味がだんだん分かっていくことになる。(天野 勝)

⑦ セント・ルイス教員養成校／シニア海外ボランティア（理数科教師）活動

ガーナの2名のシニア海外ボランティアは鈴木光次郎さんと平野さんの二人。予定には入っていたが、平野さんとは一度も会うことがなかった。

鈴木さんは沖縄での教師経験を経て、退職後、ガーナで理科教師をやっている。ほとんど話す機会はなかったが、教材や授業のことを語る様子から、60代とは思えない、バイタリティや積極性を感じた。協力隊の広報誌「tro-tro」にもたびたび登場するし、食事会でも愛嬌をふりまき、周りから「すーさん」の愛称で呼ばれる親しみやすさもあって、シニア海外ボランティアとしてまさに適任な方だと感じた。収入はほとんどないというシニア海外ボランティアであるが、現地の貴重な戦力として活躍されている印象を持った。

鈴木さんが活躍するセント・ルイス教員養成校はちょうど夏休み中だったが、課外授業があるようで、他の学校からの学生が大勢来ていて、それぞれの教室で講義を受けていた。(天野 勝)

⑩ カクムナショナルパーク

クマシからケープコーストに向かう途中に寄ったカクムナショナルパーク。「熱帯雨林の樹幹の上に吊り橋を渡し、その上を歩くことができるツアーが評判」との触れ込みであったが、資料も表示も説明もほとんどない

ので、熱帯雨林の様子を見学することはできても、その樹木の名前や林の成り立ち・働きなどについて学ぶことはできなかった。せっかく40セディも払っていただき高いところまで登山したのだから、吊り橋を渡るだけでなく学びの場面がほしかった。

それでも、案内してくれた若者ガーナ人のユーモアあふれる言動や、雨上がりのぬかるんだ坂道をズボンで汚しながら登る苦勞、吊り橋から見る壮大な景色は、思い出に残るものとなった。(天野 勝)

⑰ 伊藤忠商事によるカカオ輸出関連の講義

伊藤忠商事の神保さん。夫がガーナ人。カカオ豆の卸売などに関わっている。日本人は高くてもいいものを買うので、日本が輸入するカカオの8割はガーナ産。ガーナでは、カカオの生産の9割を小規模農家が行っている。児童労働については、東京書籍の中学英語教科書 New Horizon 3年の教科書の中で取り上げられたり、堀米薫さんの「チョコレートと青い空」という書籍も紹介されたりしていたが、子どもが家族の仕事を手伝うのが日常的なガーナで、児童労働か否かの判別はむずかしいと感じた。カカオはカカオボード（国営）により生産管理され、買い取り価格が一定なので収入が安定する。ガーナ国民の半数がカカオ生産に関わっているという。IMFの援助も受けているというが、国がバックアップしている状況はガーナにおけるカカオの品質の信頼性やカカオに賭ける意気込みを感じさせた。(天野 勝)

⑱ JICAガーナ事務所関係者との夕食会

今回の研修の食事の大部分を占める中華。ボランティア・専門家との夕食会に続き、この夕食会も中華だった。ガーナの金や石油の採掘では中国の進出が目覚ましいと言うが、こんな所にもアフリカへの中国進出を感じる。

この日も新たな出会いや親しくなる機会をもらった。JICAの関係者と会うと、それぞれの経歴が波乱に富んでいたり国際的であったりして刺激的である。マラリア感染し死を覚悟した方や、アメリカ人の夫を亡くし子どもはアメリカに住み単身ガーナで仕事をしている方、エボラ出血熱の流行で走り回っていて食事会に遅れてきた方など、いろいろな方と話をした。

今回の研修で出会った日本人の方に共通していること、それは「アフリカに偏見を抱いていないこと、むしろ興味を持ち自分の力をそこで生かそうとしていること」「日本と全く違う土地であっても恐れることなくそこに溶け込み順応していること」。誰でもできることではない。(天野 勝)

● その他印象に残ったエピソード（小学校訪問時の子どものけがとその後）

ドンポアセの小学校訪問で活動中に、一人の子どもがけがをした。骨折の重傷だったが、JICA調整員の加藤さんを中心に迅速に対応され、治療やその費用などについて円滑に進んだようであった。

この事件の中で印象に残ったのは、まずは文化の違い。私たちグループでも、お見舞いや見舞金のことについて話し合ったが、見舞いの時期や形式・見舞金の額などについて分からないことも多く、いろいろとアドバイスをいただきながら考えた。

その他にも、交流時の活動内容やトラブル時の補償など、いろいろなことを考えさせられた出来事であった。

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [KWM_0620]

◇キャプション： 教師である幸福

◇解説文：

多くのことを学んだガーナでの13日間。学んだことを伝えるのが私たちの使命であるが、伝える相手が大勢いること、そしてその対象が未来を担う子どもたちであること。その幸せを感じずにはいられない。



●写真2…ファイル名 [KZE_1218]

◇キャプション：自分の身は自分で守る

◇解説文：

誰に言われずとも、1日の始まりは体へ防虫薬を塗ることから。そして携帯用蚊取り器を携え、ミネラルウォーターを持っていざ出陣。食事の時は生ものに気をつけ、集団行動を厳守し、夜は蚊取り器のスイッチを入れて就寝。野口英世の苦労を少しだけ味わえた13日間だった。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

日本の蚊取り線香は、ガーナの蚊に効かない。青年海外協力隊の方にもらった塗り薬は日本で売っている防虫薬の2倍以上のディートが含まれていた。日本のでも複数を使いながら対処はできると思うが。

カメラ・ビデオカメラの映像を共有できるのは大変ありがたいが、逆に言えば、自分の撮ったものが他の人の資料ともなる訳だから責任を感じた。使用する機器の不調がないか点検したり、使い方を確認したり、日時がちがっていないかを見直したりなど、事前にしておくことで後悔することが減ると思う。その上で起きた失敗などは仕方がないと割り切れる。

「予定通り物事が運ばないのは当たり前」なのだが、JICA中部&現地スタッフの方の努力は想像以上だった。事前にさまざまな形で打ち合わせをして準備いただいたであろうことを、現地で活動・交流をしながら身をもって感じた。だから事前学習会で交流について打ち合わせする時には、「予定通り事が運ぶ」と仮定して質問や準備物・交流内容を練っていくといいと思う。スタッフの方の努力に報いるためにも。

7. その他全般を通じての感想・意見など

JICA中部やNIED・国際理解教育センターの方には大変お世話になりました。「感謝されるために人に尽くす」のではなく、「研修者が自分で学ぶために必要とする支援をする」「コミュニケーション・共有を大切にする」という、研修で学んだことを地で行く配慮に、たびたび助けられました。おかげさまで、こんなに多くのことを得ることができました。現地スタッフの方にもよろしくお伝えください。

以上